魔法少女リリカルなのはStrikerS ～Hidden The Fact～

フォルネウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～

【Ｎコード】
Ｎ４００７Ｚ

【作者名】
フォルネウス

【あらすじ】
何処にでもいるような普通の高校生『甲野カズキ』。当たり前の生活が続くと疑いもしていなかったカズキは、ある日の学校帰りに突然事件に逢ってしまう。
事件後、目が覚めたカズキがいたのは全く知らない場所だった。
そしてカズキは、自身もまだ知らない自分の『真実』に翻弄されて行く……。

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』の二次創作です！
一部、『なのは』とは違う作品のキャラや設定が登場します。
初めての作品なので駄文だらけだと思いますが、よろしくお願いします！
感想や指摘、アドバイス等大歓迎です。
ただし、度を越えた批判はご遠慮下さい。
不定期更新になるかもしれません。ご了承下さい。

プロローグ　全ては唐突に（前書き）

初めまして！
初めての投稿なので、色々と駄文が目立つと思いますが、読んで頂けると嬉しいです。

では、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

プロローグ　全ては唐突に

ここは、どこにでもあるような普通の町の大通り。
人が行き交い、道路には車が走る。
そんな町中を、１人の少年が、家路を急いで……といっても、至ってゆっくり歩いていた。

「あー、疲れた～。」

少年の名は『甲野カズキ』。
高校１年生…つまり１６歳である。
別段優等生でもなく、かといって落ちこぼれでもない、至って普通の少年。
ただ１つだけ普通ではない所があるとすれば、１人暮らしである事だろう。
カズキは物心ついた時には孤児院に保護されており、親の顔も知らない。
孤児院では虐待なども無く幸せに暮らしていたが、高校生にもなってお世話になりっぱなしなのは悪いと思い、今は１人暮らしである。
それでも家賃は孤児院の院長が払ってくれている。
カズキはアルバイトをしているが、それだけでは食事代だけで精一杯なのだ。

「ちくしょー…、何だかんだ言ってもう７時だよ…。」

実は現在の時刻は午後７時１５分。
カズキは先程まで学校で友人の手伝い（強制）をさせられていた。
そのせいで疲労困憊。
走りたくても走れない。

あと、物凄く腹が減っている。

「さっさと帰りたい…。こういう時は近道だな♪」

そう言って、カズキは大通りから少し奥の路地に入った。
外灯が少なく、人通りも無いに等しいが、家までは一番の近道だ。

「……暗い。」

今更な感想を口にしつつ、カズキは歩いていく。

カズキが路地に入ってから数分後。

「うん。家まであと少し。しかし、腹減った…。帰ったらのんびりテレビでも見ながら晩ご飯食べよ。」

そう言いながら歩いて行くと、1人の人影がこちらに向かってくる。
黒い帽子とサングラスのせいで、顔が全く見えない。

「あれ？この通りに人がいるなんて珍しい。」

そう呟きながら、カズキがその人影とすれ違った…いや、『すれ違おうとした』瞬間…。

「……ッ！？」

カズキは腹に違和感を感じ、直後に激痛を感じてその場に倒れた。

「あっ…づっ！？（い、一体何なんだ…！？）」

正直、思考が追いつかない。
よく見ると、すれ違った人影…おそらく男性だろう、その手にナイフが握られている。

（なるほど…。刺されたって訳か…！）

その証拠に、腹からはおびただしい量の血が出ていた。
カズキが状況を理解した時、男は元来た方向に歩いて行く。
カズキはそれに気付いていない…いや、気づける訳がない。
腹を刺された痛みは形容し難いものだ。
最悪なことに、カズキは動く力が残っていない。
よりにもよって、今この場にはカズキと、たった今去って行った男しかいない。
ただでさえ人がいないのだから、誰かが発見してくれる可能性など絶望的だろう。

（ダメだ…動けない……。僕は死ぬのか…？仕方ないかな…。でも…まだ院長に恩返しできて無い…。嫌だ…こんな……ところ…で……。）

そこで、カズキの意識は途切れた。

「……うぅ……。」
あれからどれくらいの時間が経ったのか。カズキは目を覚ました。
……大事な事なのでもう一度言おう。『カズキは目を覚ました』

のだ。

「あれ…？確か、僕は腹を刺されて…倒れて……！？」

カズキは現在の状況に驚愕した。
無論、生きている事に対してではない。
あの後、偶然通り掛かった誰かによって救急車を呼ばれ、病院で治療を受ける可能性は十分にあるのだから。
しかし、この状況はあまりに異常だった。
まず最初に、傷が完治している。
いくら病院でもあの傷が完治するはずがない。
少なくとも痕は残るはずなのに、傷など初めから無かったかの様に跡形もなく消えている。
続いて二つ目は、現在の服装である。
刺された時は学校の制服を着ていたはずなのに、今の服装は普段着。
しかも普段からカズキが着ていた物とまったく同じで、血痕も無い。
そして三つ目、恐らくこれが一番異常だろう。
それは現在地だ。
辺り一面、見渡す限りの森。
まるで青木ヶ原樹海ではないかと思う程の森が広がっている。

「何なんだ…ここ…。」

カズキはこれ以外に言葉を
発することなどできなかった…。

プロローグ　全ては唐突に（後書き）

プロローグ、終了です！

カズキ「いや、ちょっと待て。」

どうかした？

カズキ「どうかしたじゃ無いよ。なんか意味不明だし、『なのは』の要素全然無いし、僕はいきなり殺されかけるし！」

仕方ないだろ。

それに、あの犯人だって後々重要な役割を果たすんだから。

カズキ「はいはい…。」

次回から本格的に話が進みます！

次回は『なのは』の世界観には無くてはならない物が登場します。

もしかしたら、２人目のオリキャラが登場するかもしれません。

カズキ「皆さん、よろしくお願いします！」

それでは…

『ドライブ・イグニッション！！』

第1話　戸惑い・出会い・そして戦い（前書き）

ようやく本格的に物語の開始です。

しかし、無理矢理ぶち込んだ感が凄い…。

それでは…

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第1話　戸惑い・出会い・そして戦い

学校の帰り道にいきなり刺されたカズキは、『気が付けば森の中にいる』と言う異常事態に混乱していた。

「もう訳がわからない…。傷は治ってるし、服装は変わってるし…。そもそもここはどこ？」

カズキは周囲を見渡すが、やはりどこを見ても青々とした葉をつけた木が生い茂っているばかり。

「あーもう！どうすれば良いんだよ！」

カズキは地面に仰向けに倒れ込む。

「はぁ……本当にこれからどうしよう…。」

現在地が解らなくては帰りようが無い。
そもそも、カズキの住んでいた場所は都会の真っ只中。
周辺にここまで広大な森林など存在しない。
つまり…、どう頑張ってもカズキは歩いて家には帰れないのだ。

「……なんか、考えるのも疲れてきた…。」

カズキは思考を放棄しようとする。
しかしその時…。

《……た……スター…。》
「！？」

カズキの頭に女性のような声が響いた。
「な……何？」
《マ……ター……マスター…！》
「この声…。どこから？」
声が徐々にはっきりと聞こえてくる。
《マスター…、聞こえますか？》
「聞こえるけど、一体誰？どこから話してるの？…て言うかマスターって…？」
《ここです。あなたのポケットの中です。》
「ポケット？」
カズキはズボンのポケットの中を探る。
すると、エメラルドグリーンの正八面体の宝石があった。１つの頂点に取り付けられた金具に鎖が通され、ペンダントのようになっている。
「宝石…？」
『初めまして、マスター。やっと見つけて頂けましたね。』
「うわぁっ！？」
カズキは驚いて尻餅をついてしまう。
「ほ…宝石が……喋った……！？」
『すみません。驚かせるつもりは無かったのですが…。』
「いや、驚くよ普通…。」
とりあえず、謎の喋る宝石と話す事にした。

「えーと…、君って一体何なの？」
『私はデバイスです。名称はフォルクスと言います。』
「デバイス…？」
『魔導師が魔法を使う為の媒体です。』
「……？？」

魔導師だの魔法だの、話がさっぱりなカズキ。

『…もしかして、知らないのですか？』
「知らないも何も…。そもそも、どうして僕が君を持っているのかがさっぱり…。」
『やはりですか…。』
「え？」
『私は何故かあなたがマスターとして登録されていて、どうしてここにいるのか解らないのです。』
「……。」

この答えはカズキにとって予想外だった。
デバイスがどういう物なのかはわからないが、人工知能か何かで意思が有るのならば、ここがどこなのかを聞くことができると思っていたのだ。
しかし、これでは質問などできない。

「まぁ、お互いに何も知らないみたいだし、話し相手ができるのは嬉しいからね。よろしくね、フォルクス。」
『はい。ところで、これからどうするのですか？』
「うーん…。とりあえず、現在地が解らないとどうしようも無いからな…。とにかく森から出よう。」
『了解です。』

カズキはフォルクスを首にかけると、立ち上がって歩き出そうとする、が……。

ガサガサッ！

「！？」

近くで音が鳴った。

「何だろう？」

『気をつけて下さい。』

「うん。」

カズキは周囲を警戒する。

ここは森の中。

猛獣などが出てきたら一大事だ。

「何も……来ない…？」

『しかし、近くに生体反応があります。』

「そんな事も分かるの！？」

『はい。』

「その反応があるのはどこか教えて？」

『了解！』

フォルクスの案内にしたがって森の中を歩いていく。

『この近くです。』

「えーと……ん？あれは？」

カズキの視界に映ったのは、倒れている人影。

「人だ！」

カズキは人影に駆け寄る。

「あの、大丈夫ですか？」

倒れていたのは、明るい茶色の髪の少女だった。

身長から考えると、カズキと同い年か年下くらいだろう。

どういう訳か服装はボロボロである。

「気絶してるのかな…？」

『そのようです。』

「どうしよう…。森の外に町があれば病院に運べるんだけど…。て言うか、その前に森を出ないと。」

しかし、目の前で倒れている人を見捨てる訳にはいかない。

カズキは少女を連れて行く事にする。

「よいしょっ…と。」

『大丈夫ですか？』

「大丈夫だよ。一応、体力には自信があるから。」

そう言って、カズキは少女を背負った。

そしてそのまま森の出口を探そうとした、その時…。

『気をつけて下さい！何か来ます！』

「え？一体なにが……うわっ！？」

カズキが言い終わる前に、青白いレーザーが飛んで来た。

幸い、カズキの横に着弾した為ケガは無い。

「今度は何！？」

その問いに答えるかのように、灰色のカプセルのような機械が２０体ほど現れた。

「嫌な予感がする…。」

カズキの予感は的中する。
機械は突然、カズキの足元にレーザーを発射した。
カズキはとりあえず全速力で逃げるが、少女を背負っている為、速度が出ない。
しかも機械は浮いている為、物凄いスピードで追いかけてくる。

「これじゃ追い付かれる……ヤバッ！」

カズキの目の前に大木が現れる。
カズキは衝突しないように足を止めてしまう。
もう逃げる事は出来ない。
「……絶体絶命…かな。」
機械はどんどん近付いてくる。

『……マスター。』
「なに？」
『その人を地面に降ろして、私を持って下さい。』
「い、いきなり何を言って…？」
『お願いします。』
「……分かったよ。」

どのみちこのままではどうする事も出来ないので、フォルクスの言う通りにする。

「で、どうすれば良いの？」

『‘セットアップ’と言って下さい。』

カズキは少し考える。

「……どうなるか解らないけど、やるしか無いかな。……セットアップ。」

『Ｓｅｔ　ｕｐ.』

いきなりフォルクスが眩い光を放ち、カズキはその光に包まれる。そして光が収まると、そこには姿が全く変わった……『バリアジャケット』を纏ったカズキがいた。

「これは…？」

先程まではグレーねＴシャツに青いジーパンだったカズキの格好は、青い長袖のシャツに黒いズボン、白い半袖のコートに変わっている。両手にはフィンガーグローブがはめられ、腕にはガントレット、スネにはアンクレットが装備されている。右手には一振りの両刃剣が握られている。

「この姿は……？それに、この剣は…。」

『どうやら成功のようですね。』

剣に取り付けられたエメラルドグリーンのコアが点滅し、声が聞こえる。

その声は……。

「もしかして、フォルクス？」
『はい。一緒に戦いましょう。』
「戦う…？」

カズキは少し戸惑うが、後ろに寝かせた少女を見て決心を固める。

「……分かったよ。行こう、フォルクス！」
『はい！』

カズキはフォルクスを両手で握り、機械の軍団に突っ込んで行く。
機械はカズキにレーザーを放つが、それを全てフォルクスで弾き、機械に斬りかかる。
しかし、機械はカズキの攻撃をかわし続ける。

「くそっ！当たらない！」『ですが、初めての戦いでこれだけの動きは凄いです。』

確かに、カズキの動きには素人離れしたものがある。
現に、雨のように放たれるレーザーをほとんど回避し、避けきれない物は全てフォルクスで弾いている。
その為、今のところ被弾はゼロ。
しかし、このままでは危険だ。
カズキの体力は無限では無い。
このまま動き続ければ、いずれは体力が尽きて動けなくなるだろう。
カズキは知らないが、バリアジャケットを纏っている間は大抵の攻撃からは身を守る事が出来る。
しかし、万が一ダメージが通ってしまえばそこで終わりだ。
カズキはなんとかしてこの状況を打開する方法を考える。

（剣じゃ攻撃が当たらない、逃げる事も出来ない、どうすれば…。）
『マスター！後ろです！』
「！！」
カズキが振り向くと、一体の機械が少女にレーザーを放とうとしていた。
「させるか！」
カズキは少女を攻撃しようとしていた機械を攻撃する。
レーザーの発射体制だった機械は避ける事ができず、真っ二つに切り裂かれた。
「間一髪…！でも、どうする……。」
未だに機械は１９体いる。
（飛び道具……ミサイルみたいに敵を追いかける武器があれば…。）
カズキの足元に円形の魔法陣が出現し、周囲にエメラルドグリーンの光の球が出現する。
『これは…？』
（たくさんの敵を追いかけて、纏めて撃破する…！）
光の球が猛スピードで動き出し、機械に命中する。
光の球…否、光弾は一瞬だけ何かに阻まれるが、それを突き破って命中した。
同じようにして、他の機械にも光弾が次々と命中。
瞬く間に機械は全滅した。
「ハァ…ハァ……お、終わった…？」

『はい。敵は全滅です。お疲れ様でした。』
「うん…。」

バリアジャケットが解除され、フォルクスもペンダントに戻る。
カズキは少女の無事を確認すると、その場に座り込んだ。

「…あれ？そう言えば、さっきの光の弾は何だったんだろ？」
『もしかして、無意識の内に魔法を使ったのですか？』
「魔法…？あれが？」
『はい。』
「……全く考えて無かった…。」
『それは…凄いです。』
「とりあえず、少し休もう…。疲れた…。」

カズキは森を出る事を一時中断し、この場で休憩する事にした。

同時刻、別の場所。

「謎の魔力反応って、本当？」
「うん。場所は、聖王教会の近くの森の中。ガジェット反応もあったんやけど、すぐに消えてもうた。」
「なるほど…。とりあえず、現場に行って状況を確認しないと。」
「私も行くよ。」
「2人共ごめんな。試験の監督が終わったばかりなのに。色々とやることもあるやろ？」「大丈夫だよ♪やることと言っても直ぐに終わるし。」
「そういう事。それじゃ、行ってくるね。」
「うん。2人共気い付けてな。」

カズキのいる場所に、２人の女性が向かっていた…。

第1話　戸惑い・出会い・そして戦い（後書き）

今回の話で違和感を持った方、正解でございます。

カズキ「どういう事？」

実は、わざと少しおかしくした場所があるんだよ。

カズキ「何で？」

君の異常な能力やその他諸々の伏線。

カズキ「…いやちょっと待ってよ。確か僕ってチートじゃ無いんだよね？」

チートでは無いけど、異常ではある。

カズキ「うーん…？」

リリなのファンの皆様は、今回登場した機械が何か分かりますね？

次回はカズキがあの人達と出会います。

そして、今回登場した少女の正体が少しだけ明かされます！

それでは次回もお楽しみに♪

『ドライブ・イグニッション！』

第2話　遭遇、そしてもう1人の少年（前書き）

予定していた展開まで進まなかった…ｏｒｚ
しかも超短い……。
それでも良ければご覧下さい。

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第2話　遭遇、そしてもう1人の少年

カズキは木陰に座って休憩していた。
目の前には、未だに気絶したままの少女が横になっている。

「…それにしても、この子はなんで倒れてたんだろう？」
『誰かに襲われたのでしょうか。』
「この深い森の中で？それに、何もないのにいきなり襲われる訳……あるか…。」

カズキは自分という実例があるので否定できない。

「まあ、詳しい話はこの子が目を覚ましてから聞けば良いや。。」
『はい。』

そう言いつつ、カズキは先程の戦闘の事を考えていた。

（さっきの技、僕が考えた通りの攻撃だった…。使った事の無い技をあそこまで思い通りに……。）
『マスター、誰か来ます！』
「！」

カズキは周囲を警戒する。
戦った直後である今、敵に襲われでもしたらひとたまりも無い。
何があってもすぐに逃げられるようにする。
そうしていると、女性の声が聞こえてきた。

「えーと、魔力反応があったのって確かこの辺だったよね？」
「その筈だけど……あ！」

女性が何かを発見したらしい。

（やっぱり僕を探してる……？）

カズキは少女を背負って逃げようとするが……

「あ、そこの人、止まってくれませんか？」

「何もしなければ危害は加えません。」

……無理だった。

正直、全力で走っても逃げ切れる自信は無いので、カズキは言われた通りにする。

しかし、警戒は続ける。

と言うか、警戒心むき出しである。

「……。」

「うーん…、ここまであからさまに警戒されるとは思わなかった…。」

「まぁ…、仕方ないよ。」

カズキの前に現れたのは2人の女性。

1人は、栗色のツインテールに白い服を着ており、もう1人は、金髪のツインテールに黒い服と白い上着を着ている。

白い服の女性は先端部が金色で赤い透明の球体が取り付けられた杖を、金髪の女性は柄の長い黒い斧をそれぞれ持っている。

「…あなた達が誰なのかは分かりませんが、僕はこの子を病院に運ばなきゃいけないんです。邪魔しないで下さい。」

「…あれ？《管理局の事を知らないのかな？》」

「《次元漂流者ならあり得るけど……。》」「《ともかく、話を聞かないと。この大量のガジェットの残骸の事も含めて。》」
「《うん。》」

とはいえ、カズキは未だに警戒を解いていない。
このままにらみ合いが続いてはラチがあかないので、フォルクスが助け船を出す。

『あの、どうやらお2人は魔導師のようですが…。』「そうだよ。そう言えば名乗って無かった…。管理局機動六k……」
「ちょ、ちょっと待ってなのは！私達の所属、まだ六課じゃないよ！」
「あ…、さっきまで六課の話をしてたからつい……。では改めて…、時空管理局航空戦技教導隊所属、高町なのは一等空尉です。」
「同じく時空管理局、フェイト・T・ハラオウン執務官です。」

2人の女性……なのはとフェイトはカズキに（と言うよりフォルクスに）自己紹介する。

「…時空管理局……？」
「やっぱり知らないんだ……。」
「という事はやっぱり…。」
「次元漂流者かな…。」
「……？？？」

カズキはもはや何が何だかわからなくなっていた。

その頃、カズキ達がいる場所とは別の森の中。

ここに、カズキよりも少し背が高い少年と小学生くらいの少女が立っていた。
少年は紺色のローブを纏っていて、その中の詳しい服装は外からでは伺い知る事は出来ない。
少女はピンクの服に白いスカートを身に付け、淡い茶色の髪には蝶を模したような髪飾りを付けている。
少年は小さな手鏡を持っており、その手鏡が光を放ち、空間に画面のような物を投影している。
その画面の中には1人の女性が映っており、少年はその女性と話している。

「……で、封真さんがあいつをこの世界に送り届けたと…。何やってんですか、あなたは。」
『何が？』
「『何が？』じゃ無いですよ。封真さんが連絡をよこしてくれたから良かったものの、何も知らないあいつをこの世界に1人で置き去りにしてどうするんですか！」
『なんで私に言うのかしら？』
「惚けないで下さい。封真さんに頼んで、あいつをこの世界に送り届けさせたのはあなたでしょう？」
『さあね♪それにあの子は大丈夫よ。だってあの子は……。』
「……まぁ、そうなんですけどね。それでも、何かあったら大変です。とりあえず、僕はあいつを捜して、何かあったら助けますよ。」
『分かったわ。それじゃ、頑張ってね。……あ！それから！』
「何ですか？」
『その世界の一級品のお酒を探して……』
「届けませんよ！？あなたはいい加減にその酒癖をなんとかして下さい。四月一日（わたぬき）がかわいそうです。」
『酒癖を直すのは無理な話ねー♪』
「……そうですか。じゃあ後で何かお酒を送りますから、くれぐれ

も飲み過ぎないで下さいよ。」
『りょうか～い♪』
光が収まり、少年は鏡をズボンのポケットに収納する。
「まったく、侑子さんは楽天的過ぎるんだよ…。」
「でも、親しみやすい。」
「確かにね……。とにかく今は、あいつを捜すのが先決だね。封真さんが場所を教えてくれなかったし、よりによって連絡がつかないし……。ま、頑張ろう。」
「うん。」
少年と少女の2人は森の中を歩いて行った。

第2話　遭遇、そしてもう1人の少年（後書き）

やっぱり短い…。
しかも前回に予告した所まで行けなかった…
カズキ「ちゃんと予定を立てないから…。」
反省しています…。
でも、こうしないと非常に中途半端な状態になりそうだったので…。

さて、今回の話で『もう1人の主人公』と『魔法少女リリカルなのは以外のキャラ』が登場しました。
全員の名前は出してませんが、どんな作品のキャラか気付きましたでしょうか？
カズキ「分かり辛いと思うけど……。」
ですよねー…。

えー、今回の失敗を踏まえ、ヘタに次回予告はしない事にします。
という訳で、次回も読んで頂けると嬉しいです。
『ドライブ・イグニッション！』

第３話　次元の魔女と稀代の魔術師（前書き）

今回の話は、カズキ達がいる世界とは違う世界での出来事です。
その為、『リリカルなのは』の要素はほとんど登場しない上、例によって短いです。
その代わり、ＣＬＡＮＰの作品を知っている人は良く分かる人物が登場します。
読みづらい方もいらっしゃるかもしれませんが、ご了承下さい。
これが無いと話が進まないんです…。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第3話　次元の魔女と稀代の魔術師

ここは、カズキ達がいる世界とは別の世界にある『願いが叶うミセ』。
それ相応の対価を支払えばどんな願いも叶えられると言う店である。
そしてこの店の主人は、例えどんなに歪んだ願いであっても、対価さえ払えばその願いを叶える。
もちろん、それがどんな結果をもたらすのかを警告はするし、覚悟のない者の願いは叶えない。
そんなこの店の主人とは、先程まで森の中にいる少年と話していた『壱原侑子』である。
一部の人物からは『次元の魔女』と呼ばれる彼女は、今は店の中にある和室で煙草をふかしてくつろいでいた。

「〜〜♪」
「どうしたんですか侑子さん？」

侑子に話しかけたのは、この店でアルバイトをしている『四月一日君尋』である。
彼は『アヤカシ』が見えるという特殊体質で、侑子の目の前で『アヤカシが見えなくなればいい』と願ってしまった為、店でこき遣われる羽目になった。
余談だが、店での格好は割烹着である事が多い。

「いや〜、どんなお酒が来るか楽しみで♪」
「またリョウ君にお酒を頼んだんですか！？」

リョウと言うのは、先程侑子と話していた少年の名前である。
本名は『篠崎リョウ』。

とある理由により様々な異世界を旅している少年である。
リョウは最近仲間が1人増えたのだが、それが小学生くらいの女の子だったため、侑子に散々からかわれている。
侑子がリョウにお酒を頼むのはいつもの事なのだが、そのたびに侑子がベロンベロンに酔っ払うため、四月一日はうんざりしていた。

「いい加減にして下さいよ…。飲んだくれて酔っ払った侑子さんの扱いは大変なんですから……。」
「まあまあ、そう言わずに～♪」

四月一日は，誰のせいだよ，と思いつつ、別の部屋を掃除する為に歩いて行った。

「……それにしても、封真はちゃんとあの子を送り届けてくれたみたいね…。あの世界は未だに『彼』の手が及んでいない数少ない世界。しっかりと守らないとね…。さて、あなたはどうするのかしら？……」

侑子は手に持っていた煙草を置き、『ある男』の名前を口にした。
その『男』の名は……。

「……飛王（フェイワン）・リード…。」

「…ふん。魔女も余計な事をしてくれたものだ。」

ある世界に存在する自らの根城で、ため息混じりに声を漏らした男

がいた。
言葉では表現し辛い髪型で、右目に片眼鏡を掛けたこの男…『飛王・リード』は巨大な椅子にふんぞり返り、目の前に設置された大型の鏡に映された映像を見ていた。
その映像とは、カズキがなのはとフェイトの2人と遭遇した時の物だ。

「災いの種は早めに摘んでおこうと、手駒を使って殺させたというのに……。まあ良い。『ゆりかご』とか言うものが手に入れば、あの世界に用は無い…。その後はあらゆる世界の理(ことわり)を壊し、『クロウ・リード』すら成し得なかった魔術を完成させ、あの男を越える…！」

飛王は再び映像を見る。

「その前に、今の最大の障害であるあの小僧を消さなくてはな……。」

すると、1人の女性…『聖火(シンフォ)』がやって来た。

「…あの世界にも、羽根があるみたいです。」
「そうか…。一石二鳥と言うものだな……。」

飛王の表情は、邪な笑みで染まっていた……。

第3話　次元の魔女と稀代の魔術師（後書き）

さて、読んで頂いてありがとうございます！

？？？「イエーイ☆」

カズキ「……あのー、作者？」

ん？

カズキ「この謎の生物…何？」

ああ、これは今回の話に関連して来てもらった『モコナ＝ソエル＝モドキ』だよ。

モコナ「白モコナ参上！」

カズキ「ア、アハハ…。」

さて、今回は物語の裏側の不穏な動きが明かされました。

モコナ「侑子も出てきた～。四月一日もなつかしー♪」

前回から登場したけどね～。

モコナ「それじゃ、モコナは小狼（シャオラン）達のところに帰るねー☆」

了解、じゃあね～。

カズキ「……結局何だったの？」

さあ？

カズキ「Σえええええ！？」

次回はカズキサイドに戻ります、これは確定。
次回はどこまで行けるかな……。
て言うか、もう少し１つの話を長くしないと…。
このままじゃ短すぎる（汗）

では、至らない所だらけのダメ作者ではありますが、次回以降もよろしくお願いします！

『ドライブ・イグニッション！』

第４話　伸ばされた魔の手（前書き）

今回はリョウの活躍が少し多めです。

それでは…

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第４話　伸ばされた魔の手

なのはとフェイトの２人と遭遇したカズキはしばらくの間警戒心むき出しだったが、フォルクスの説得と２人の説明でとりあえずは納得した為、今はヘリの中で話を聞いている。
ちなみに、ヘリに乗っている理由は『任意同行』。
もちろん、未だに目を覚まさない少女も一緒である。

「……つまり、僕は異世界から何らかの理由で飛ばされてきて、ここは『ミッドチルダ』っていう世界……って事ですか？」
「そうなるね。」
「理解できたかな？」
「……すみません、何が何だか…。」
「「だよねー…。」」

なのはもフェイトも理由は解るので、無理に理解は求めない。

「それにしても、あそこまで大量のガジェットを倒しちゃうなんて凄いや。」
「戦闘経験なんて有るわけ無いのにね。」
「あれには自分でも驚いてますよ…。」
『映像記録を残してありますが、ご覧になりますか？』
「お願いしようかな。」
「……フォルクス、いつの間にそんな事を？」
『戦闘と平行して記録しておりました。何かの役に立つと思いましたので。』
「……つくづく驚かされる…。」

カズキ達は先程の戦闘の映像を見る。

「凄い…。ガジェットの攻撃をほとんど避けてる…。」
「なかなか筋が良いね。」

そして映像は、カズキが射撃魔法を使用する場面になる。

「これは…、ディバインシューターだね。」
「頭の中で攻撃をイメージしたら、いつの間にか使ってて…。」
「まあ、大体の魔法はイメージで決まるから。こういう事も珍しくは……って、ええっ！？」
「嘘……！？」
「？」

なのは達が映像を見て驚いている。

「カズキ君、これ普通に撃った？」
「『普通』の基準がわからないんですが…。」
「あぁ…ごめん。」
「何かおかしい所があるんですか？」
「魔力弾でガジェットが破壊されてる…。」
「へ？」

カズキは意味がわからなかった。
弾を撃ったのだから、当たれば破壊されるのは当たり前ではないか。

「とりあえず、はやてちゃんとも話さないとね♪」
「なのは、何で目が輝いてるの？」
「誰かド素人でも分かるように説明して下さーーーい！！！」

カズキはまったく訳が分からないまま、どこかへ連行されて（拉致

られて）いった……。

その頃…。

「アイリス、この辺りから反応が？」

「うん、間違いないよ。」

リョウが仲間の少女…『アイリス』と一緒に森の中で何かを探していた。

「飛王に見つかる前に回収しないと…。あーもう、やる事がたくさんあるのに…。」

「仕方ないよ。」

「…奴の目的は『あらゆる世界の理を壊す』事…絶対に頭のネジが１００本はプッ飛んでるな…。」

「確かに、正気の沙汰じゃないよね…。」

２人は森の中を見渡す。

「あ！リョウ、見つけた！」

リョウはアイリスが指差した方向を見ると、木の枝に白く光る美しい『羽根』が引っ掛かっていた。

「ありがとう。よし、さっさと回収して……！？」

リョウが何かを感じ、周囲を見回す。

すると突然空間が裂かれ、中から黒い人型のロボットのような物が

現れた。
手には3本の長い爪のような武器が装備されている。
「……飛王の差しがねか…。」
リョウは服の右腕の袖をまくり、中に隠れていたブレスレットを出す。
ブレスレットには青い宝石のような物が取り付けられている。
「とりあえず、一気に潰す！行くぞ、ファーブニル！」
『Ｙｅａｈ．』
「セットアップ！」
『Ｓｅｔ　ｕｐ．』
その瞬間、リョウが光に包まれる。
そして光が収まると、黒いシャツに黒いズボン、ダークグレーに紫のラインの入ったコートという組み合わせのバリアジャケットを纏ったリョウが立っていた。
両腕には少し大きめのアーマーが装備されている。
「ライト・モードセイバー、レフト・モードブラスター。」
右腕のアーマーには刃が装着され、左腕のアーマーには銃口が出現する。
「さぁ、少し眠ってろ！」
リョウはロボットの軍団に向かって左腕の銃から魔力弾を連射しながら突っ込んで行く。

「うおおおお！」

ロボットを右腕の剣で次々に切り裂いていく。

「これじゃ、どこぞのウイルスの方がよっぽど強いな！」

リョウは難なくロボットを撃破していく。

「これで最後！」

そしてロボットは全滅した、が……。

「！？やべっ！」

いつの間にか背後に出現していたロボットが爪をリョウに向けて振り降ろそうとしていた。

しかし…。

「バンブーランス！」

突然地面から竹槍が出現し、ロボットを貫いた。

リョウが声のした方向を見ると、白いマントを身に付けて仮面をかぶった少女がいた。

「リョウ、油断は禁物だよ。」

「あはは…、助かったよアイリス。」

「うん。」

少女の正体はアイリスだった。

リョウとアイリスは元の姿に戻る。

「しかし、いよいよ危なくなって来たね…。早くあいつを……カズキを捜しだして合流しないと…。」
「うん、急ごう。」
「……と、その前に。」

リョウは木の枝から羽根を取るとブレスレット…リョウのデバイスである『ファーブニル』に収納した。

「小狼（シャオラン）さん達、大丈夫かな…。」
「小狼達なら大丈夫でしょ、みんな強いからね。今度会ったらこの羽根も渡さないと。」
「そうだね。」

リョウとアイリスは再び歩き出した…。

第４話　伸ばされた魔の手（後書き）

今回もグダグタだー☆

カズキ「遂に頭が壊れたか作者？」

そんな事は無い！

リョウ「どうでも良いけど、表現がもったいぶり過ぎだと思うんだ。」

アイリス「私とリョウなんて、初登場の時に名前が出なかったし…。」

こういう書き方ばっかり思い浮かぶんだから仕方ないだろ！

さて、アイリスがなんの作品のキャラか判りましたでしょうか？

ヒントは…

・蝶型の髪飾り

・リョウの『ウイルス』というセリフ

・『バンブーランス』が登場する作品とは？

…です。

どうしても判らない方や答え合わせをしたい方は、感想かメッセージまで！

それでは次回もお楽しみに！

『ドライブ・イグニッション！』

第5話　見習い起用（前書き）

ここまでこぎ着けるのに大分かかったな…。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第5話　見習い起用

カズキはなのはフェイトと共に、ヘリである建物に運ばれた。
先程までここでは『陸士Bランク試験の結果報告』なる物が行われていたらしいが、当然カズキは何の事やらさっぱりだ。

「とりあえず、報告がてらにはやてちゃんの所に行こうか。」
「そうだね。あ、その女の子はとりあえず医務室に連れて行こう。ちゃんとした所で休ませてあげないと。」

少女を医務室に運んでから、3人は『はやて』という人物の元へ向かう。
ちなみにその道中では…、

「そう言えばさっきの女の子、リインフォースに似てなかった？」
「言われてみるとそうかも。」
「でしょ？顔つきとかなんとなく……」
「……。」

カズキは再び取り残されたとさ♪

「ほー、君がさっきの魔力反応の正体だったんか。」
「……あの、失礼ですけど、関西出身ですか？」
「良くわかったなぁ。もしかして地球出身？」
「ここは地球じゃないんですか！？」

はやてに会って早々に、カズキは声を上げてしまった。

自分の知らない場所と言う事は解っていたし、異世界だと言う事も聞いていたが、改めて聞かされるとやはり仰天する。

「もう絶対に帰れないじゃないか…。」

（（（あちゃー…。））））

『もしかしたら帰れるかもしれない』という一握りの希望を粉砕され、まるでこの世の終わりのような表情をするカズキを見て、３人は念話で相談を開始する。

「《どうしようか…。この子間違い無く次元漂流者だし、放っておく訳にはいかないし…。》」

「《そうやねー…、あ！それなら六課で保護するとか！》」

「《そ、それって大丈夫！？》」

「《平気や。１つくらい部屋は余るし、なんなら見習い起用扱いにでもすれば何とかなる。私は見とらんけど、なかなかの腕前なんやろ？》」

「《そうそう！たくさんのガジェットを一気に倒したみたいだし、育てるなら私が！！》」

「《なのは、ちょっと冷静に…。》」

「《にゃはは…、ごめん…。》」

「《それにしても、大丈夫かなそんな裏技。》」

「《大丈夫や。既に六課は裏技の塊やないか。》」

「《はやてちゃん自覚あったの！？》」

「《ちょっと驚き…。》」

「《２人共そのツッコミ何！？》」

「《と、とにかく！カズキ君は私達で保護するってことで良いの？》」

「《うん！それでオーケーや。》」

話が纏まったので、とりあえずカズキに話を切り出す。

「え、えーと…カズキ君？」

「なんでしょうか…？」

「（うわー、凄い表情やな…。）とりあえず、カズキ君は私達で保護する事にするよ。」

「……へ？」

「カズキ君、異世界から飛ばされたんやから住む所が無いやろ？もうすぐ私の部隊が始動するから、良かったらそこに住んでええよ…ってことや。」

「…でも、迷惑じゃないですか？それに、部隊って事は何かの組織でしょう？僕は部外者ですから…。」

「いや、ガジェットをメッタメタにした時点で部外者ではなくなっているような物なんやけど…。」

「え！？」

「それは冗談として、困ってる人は見過ごせないってだけや。まあ、出来れば見習いか何かになってくれると嬉しいかなー…とか考えとるけど。」

「見習い……それだけで良いんですか？」

「うん。」

「困った時はお互い様だよ。」

「……分かりました。それでは、宜しくお願いします。」

「うん！これから宜しくな！」

話が纏まった時、タイミングを見計らったかのように部屋の扉が開き、誰かが入ってきた。

「はやてちゃーん！書類の整理、終わったですよ～。」

「ありがとう。お疲れ様な、リイン。」

「はいです♪……あれ？お客様ですか？」

「さっきなのはちゃんが保護して来た次元漂流者。六課で見習いになってもらう事になったよ。」
「そうですか～。」
「…小人が……飛んでる……！？」
「にゃはは…、やっぱり驚くよね……。」
「初めまして、リインフォース？（ツヴァイ）曹長です！」
「みんなは『リイン』って呼んでるよ。」
「あ…は、初めまして、甲野カズキです……。」

ある意味本日一番の仰天イベントに遭遇しつつ、カズキは少し別の事を考えていた。

（この人漠然とだけど、さっきの子に似てる…？そう言えば、なのはさん達も『リインフォースに似てる』とか言ってたような…。）本当に漠然とだが、この『リイン』という人物はどことなくさっきの少女に似ているのだ。

「あ、そう言えば。さっき気絶していた女の子がカズキ君と一緒に運ばれて来たんだけど、その子がリインや『初代リインフォース』になんとなく似てたんだよね。」
（初代…？）
「へぇ～、ほんまか。その子は今何処に？」
「医務室に運んだよ。」
「そっか～。今頃シャマルが戻って来てると思うから、驚いてるやろな～。」
「これから様子を見に行こうと思うんだけど、はやても行く？」
「もちろん！」
「リインも行くです～♪」
「…あ、もちろん僕も。」
「それならみんなで行こう？カズキ君にシャマルも紹介したいし。」

一行は医務室へ向かった。

第5話　見習い起用（後書き）

ちょっと思ったんだけど…。

カズキ「ん？」

話の進みがやたらと悪いなー…って。

カズキ「文才が無いからでしょ？」
リョウ「自業自得。」
アイリス「フォロー出来ない…。」

グハァ！（↑９９９９９のダメージ）

カズキ「あーあ…。」
リョウ「まぁ…仕方ない。」
アイリス「それでは皆さん、次回もお楽しみに。」

『ドライブ・イグニッション！』

第６話　名前（前書き）

２４時間以内に２話投稿という快挙達成！↑
でも相変わらず短い…。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第6話　名前

少女の様子を見るため、カズキ、なのは、フェイト、はやて、リインの5人は医務室にやって来た。
ちなみに、カズキは少女が本気で心配で、なのはとフェイトはとりあえずお見舞いに、はやてとリインは『少女が心配＋カズキへのシャマルの紹介＋少女がどの程度リインフォースに似ているのかの確認の為』と、全員理由が異なっている。

「さてと、それじゃ入ろうか。」

はやてを先頭にして一行は医務室に入る。
中には明るい金髪の女性がいた。

「あらはやてちゃん、それにみんなもどうしたの？」「さっきここに女の子が運ばれて来たやろ？その子のお見舞いや。あと、さっき来たばかりの子にシャマルの紹介をと思ってな。」
「初めまして、甲野カズキです。」
「こちらこそ初めまして、シャマルです。」
「さっきの女の子はカズキ君が見つけたんよ。」
「偶然ですけどね…。」
「そうだったの…。それにしても、あの子の顔つきってなんとなくリインフォースに似てなかった？」
「シャマル先生もそう思います？」
「私となのはも同じ事を考えてたんです。」
「僕も、さっきリインさんと会った時にそう思いました。」
「そんなに似とるんかいな。」
「見てみたいです～！」
「彼女もそろそろ目を覚ますと思うわよ。」

そして、シャマルを含めた全員が少女の眠っているベッドに向かう。
「おー、確かに漠然とやけど似とるな～。顔つきと言うか輪郭と言うか…。」
「ホントですね～。」
「でしょ～！」

なのは達が『顔』についてやたらと盛り上がっていると、渦中の少女が目を覚ました。

「……ん…。」
「あ、目が覚めた？」

正直『顔』の事なんかどうでも良かったカズキが真っ先に気づいて声をかける。
なお、目を開けた事で瞳の色が『明るい紫』であることが判明。

「……あなたは…？」
「僕は甲野カズキと言います。君の名前は？」
「…名前……。」
「うん。」
「……。」
「……あれ？」
「……？」
（ええええーー！？）

どうやら彼女は自分の名前がわからないらしい。

「じ、じゃあどこから来たのかな？」

「！！！」
（今度は怯えてるし！？今まで何があったのこの子！？）
物凄く気になるが今は触れてはいけないと思い、カズキは質問を変える。
「えーと、ごめん。嫌だったら答えなくても良いから。」
「……。」
「（よし、落ち着いた。）それじゃ、別の質問をするね。何か持っている物はあるかな？」
「……これ…。」
「え？……うわ！？」
少女が手を開くと、そこに一冊の白い表紙の本が出現した。
「本……？」
「あれ？その本…。」
少女が出現させた本に反応したのはリインだ。
「リインさん？」
「表紙が白いですけど、『夜天の書』や『蒼天の書』とデザインが同じです。」
そう言うと、リインは左手に青い本…『蒼天の書』を出現させる。
とりあえず蒼天の書がいきなり出現した事にはあえて突っ込まず、そのデザインを確認する。
「本当だ…。全く同じデザイン。」
「……これ…白天の書…。」

どうやらこの白い本は『白天の書』というらしい。

「おやまぁ、ほんまに夜天の書にそっくりやな。」

ようやく『顔談義』を終えたはやてが話に合流。

「ひょっとして、魔法が記録されとるんかな？ちょっとそれ貸してくれる？」

はやては少女から白天の書を受け取ると中を確認する。

「えーと、『ホーリーダガー』に『ナイトメア』に『パンツァーシルト』…。ホーリーダガーは『プラッディダガー』みたいな物かな…、ナイトメアは解らんし…、パンツァーシルトはリインフォースも使っとったな。」

すると、いきなりカズキが口を開いた。

「……ホーリーダガーは刃……ナイトメアは砲撃……パンツァーシルトは盾……。」

「か、カズキ君いきなりどうしたん！？て言うか、なんで分かったんや！？」

「…あれ！？僕は今何を言って…！？砲撃とか刃とか、一体何のこと！？」

「カズキ君、一回落ち着いて…。」

「す、すみません…。」

とりあえず深呼吸をして落ち着くと、カズキは再び少女と話し始める。

なお、白天の書は少女に返却された。

「えーと、とりあえず名前が無いのは不便だよね…。」
「……。」
「良かったら、僕が名前、付けてもいいかな…。なぜだか分からないけど、良さそうな名前が浮かんだんだ。」
「……え…？」
「……『シルビー』なんてどうかな…。」
「……うん…。」

少女の表情が僅かながら笑顔になる。
この光景を見ていた全員がなんとも言えない空気き包まれる中、はやてはかつての自分に起きた『ある出来事』を思い出していた。

『夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る…。強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール……リインフォース…。』

（これでこの子も、きっと幸せやな…。）

はやては心の中でそう呟いた。

第6話　名前（後書き）

フラグ建設完ッ了！

カズキ「活動報告でのニヤニヤはこれが原因かあああああ！！」

まぁ『フラグを建設し過ぎてハーレム状態』にはしないから安心して。

というか雰囲気的にこっちが耐えられん。

それに、所詮は非リア充が書いている作品だから恋愛描写がほとんど書けないし。

カズキ「そりゃどうも…。」

その代わり、『ロリコンに誤解されるフラグ』が建つかもｗｗ

アイリス「あ、そう言えばシルビーさんって…。」

リョウ「アイリスほどでは無いにしろ、外見的には年下だったね…。」

カズキ「おい作者ああああ！」

はっはっは！頑張れ！！

それでは次回もお楽しみに！

『ドライブ・イグニッション！』

第７話　部屋割り（前書き）

短い話ならかなりのペースで更新できる事を発見↑

今回は平成仮面ライダーが１人出てきます。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第7話　部屋割り

予期せぬイベントが多々あったものの、無事に1日を終えたなのはとフェイトは建物を後にして、自分の部隊に帰ろうとしていた。
はやての部隊…『機動六課』が正式稼働するのは数日後。
それまでは、なのは達とはやては少しの間だけお別れである。

「それじゃ、今度会うのは六課の隊舎やね。」
「お二人のお部屋、バッッッッチリ用意しておくですよ♪」
「ありがとうはやてちゃん、リイン。カズキ君の事も、それまではお願いね。」
「うん、任せといてや。」
「それじゃ、またね。」

そうして2人は歩いて行った。

所変わって医務室。

「シャマルさん…、僕はどうすれば良いんでしょうか…？」
「そ、そう言われても…。本当にどうしましょうか…。」
「……。」

意味が分からないと思うので説明しよう。
カズキはあの後、はやてに教えてもらった自室に移動して休もうと思って医務室を出ようとした。
しかし、どういう訳かシルビーがカズキの服の袖を掴んで離さないのだ。

しかも、見かけによらず凄いパワーで掴まれているために振りほどくこともできず、現在医務室で立ち往生しているという訳だ。

（うぅ、凄い力……ダメだ離れない…。）

すると医務室にはやてとリインが到着。

「あれ？カズキ君部屋に行ってたんとちゃうの？」

「それが…。」

カズキが事情を説明。

「……成る程な～。ひょっとしてシルビー、カズキ君と離れたく無いんとちゃうかな？」

「あ、それはあるかもですね！」

「そ、そうなの？」

シルビーは小さく頷いた。

「やっぱりか～。カズキ君好かれとるなー、このこの！」

（はやてさん絶対に楽しんでる！）

「じゃあ、カズキの部屋を2人部屋に変えましょう。」

「え～、別に同じベッドで寝ても…」

「それだけは却下です！！！！」

「即答かい…。」

「それに、2人部屋にするにしても、着替えとかどうすれば…。」

「それはカーテンか何かで仕切れば万事ＯＫや。」

（先手打たれたあああ！）

ここまで来ると反論不可能だ。

下手をすると墓穴を掘りかねない。

「…分かりました……。仕切り付きの2人部屋で……お願いします…。」

「よっしゃ！そんなら部屋の調達や！行くでリイン！」

「はいです～！！」

はやてとリインは猛スピードで医務室から出ていった。

「なんと言うか…、頑張ってね。」

「はい…。」

「……♪」

そんな中、シルビーは少し嬉しそうだった。

カズキ達のいる建物から少し離れた場所。

そこではリョウとアイリス、そして1人の青年がいた。

「紅さんが来るなんて珍しいですね。何かあったんですか？」

「何か…と言うか、少し警告がありまして。」

青年の名は紅渡、『仮面ライダーキバ』に変身する『ハーフファンガイア』だ。

「警告…？」

「この世界に、鳴滝の息のかかった刺客が訪れます。」

「鳴滝の…？もしかして、この世界に士さんが？」

「いえ、この世界に『ディケイド』は来ていません。正直、僕にも理由は解りません。とにかく、気をつけてください。もはや鳴滝は鳴滝ではない……『ゾル大佐』です。」
「分かりました、気を付けます。」
「それでは、僕はこれで。」

紅渡は灰色のオーロラに消えて行った…。

「やることが増えた…。」
「大変だね…。」

リョウは大きなため息をついた。

第7話　部屋割り（後書き）

短い…。
一応、ケータイ表示で2ページは行くようにはしてます。

カズキ「シルビーと相部屋か…。」
イヤだったか？

カズキ「イヤって言うか…、落ち着かない。」
シルビー「…？」
リョウ「まぁ、頑張れ。」

さて、そろそろＳｔｒｉｋｅｒＳを見直さないとヤバいかも知れない…。
それから、オリジナルライダーの名前…どーしよー…。

そんな訳で、次回の更新は遅くなるかもしれませんがよろしくお願いしますｍ（　）ｍ

『ドライブ・イグニッション！』

第8話　紫電烈火（前書き）

今までで一番長く書けたー！
でも最初のあたりがグッダグダー…。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第8話　紫電烈火

カズキが管理局に見習い起用される事が決まってから2日。
はやての新部隊、『機動六課』が正式稼働するまで日数は残り僅か。
カズキとシルビーははやてとリインと共に、今まで寝泊まりしていた建物から六課の隊舎となる建物にやって来ていた。
ちなみに現在、シルビーははやてのお下がりの服を着ている。

「機動六課隊舎に到着や！」
「やっぱり大きな組織の建物って立派だなぁ…。」
「立派です♪」
「これ、部屋の鍵と隊舎の地図。とりあえず制服に着替えて部隊長室まで来てな。」
「はい。」

カズキは自室（カーテン付き2人部屋）へ向かう。

「なかなか広い部屋だね…。」
「……。」

相変わらずシルビーの反応が薄いが、カズキはあまり気にしない。
一度カーテンを閉めて管理局の制服に着替え、部隊長室に行こうとすると…。

「……。」

シルビーが凄まじいパワーでカズキの袖を掴む。

「あ…、一緒に来る？」
「……うん…。」
例によってシルビーが付いてくる事になった

部隊長室。

「失礼します。」
「お、よう来たな～。やっぱりシルビーも一緒なんやね。」
「すみません…。」
「いや、全然ええよ。仲が良さそうで何よりや♪」
「あはは……。」

正直『この人本当に部隊長？』と思ったカズキだが、そこにはあえて突っ込まない。

「ところで、僕を呼んだって事は何か用があるんですか？」
「うん。見習い起用にすると言っても、カズキ君て戦闘経験が全然無いやろ？」
「そこで、カズキにはこれから模擬戦をしてもらうです！」
「……え？」

いきなり過ぎてカズキは反応が遅れる。

「と、言う訳で！早速レッツゴーや！！」
「え……ち、ちょっとはやてさん！？腕を引っ張らないで下さい痛いですってばーーーーー！！！！」

カズキがはやてによって強制連行された。
「シルビーは私達と一緒に見学です♪」
「……。」
シルビーは静かに頷くと、リインと共にはやて達の後に付いて行った。

敷地内にある開けた場所。
ここにはやてがカズキを（強制的に）連れて到着、後ろからはリイン達も来た。そこにいたのは、ピンクのポニーテールの女性。
「紹介するな。六課の副隊長の1人で私の家族の…」
「シグナムだ。お前の事は主はやてから聞いている。よろしく頼む。」
「あ、はい。よろしくお願いします。」
『主』と言う部分が少し引っ掛かるが、今は気にしないでおく。
「シグナムには模擬戦の相手をしてもらうで。」
「聞いた所によると、剣を使い、訓練もなしに初戦闘でガジェットの軍団を全滅させたそうじゃないか。私もそんなお前と手合わせ願いたかったのだ。」
シグナムの目がとてつもなく輝いている。
「は、はぁ……。」
「それじゃカズキ君、シグナム、模擬戦の準備や。」
「了解です、主はやて。行くぞ、レヴァンティン！」

『Ｊａ！』

シグナムが騎士甲冑を展開し、片刃剣のアームドデバイス・『レヴァンティン』が装備された。

「さぁ、お前も武装を整えろ。」

「……はい！フォルクス！！」

『Ｓｅｔ　ｕｐ.』

カズキもバリアジャケットを展開、基本の両刃剣形態である『ブレードフォーム』のフォルクスを右手に握る。

「それじゃ始めるで。」

「レディー…」

「「ゴー！！」」

「ハアアアアア！！」

「うおおおおお！！」

シグナムとカズキは互いに剣をぶつけ合う。

シグナムは副隊長に抜擢されるだけあり、達人級の剣捌きを披露。

対するカズキは戦闘経験が無いに等しいにも関わらず、シグナムの攻撃を全て回避あるいは受け止めると言う驚異的な動きを開始。

これにははやてもリインも驚くしかない。

「カズキ君てほんまに戦闘経験無いんか…？シグナムの攻撃を全部防ぐってどんだけやねん…。」

「凄すぎるです…。」

しかし、この２人には決定的な違いがある。

シグナムは幾多の戦闘を経験してきた為、戦いには慣れているし魔法の扱いもお手の物だ。
しかしカズキはその類いの知識がない。
使える魔法と言えば、森でガジェットを全滅させたディバインシューターだが、今のカズキは発動させるのに相当時間を食う為に使えない。
必然的に、カズキはシグナムの攻撃に対して防戦一方になる。

「ッ…！結構キツい…！！」
『頑張って下さい！』
「なるほど、かなりの腕前だな。だが、これで終わりだ！」

シグナムは一度カズキから距離をとる。

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

レヴァンティンのカートリッジがロードされ、薬莢が排出される。
そして、レヴァンティンの刀身が炎を纏う。

「紫電……一閃！！！」

シグナムは炎を纏ったレヴァンティンをカズキへ勢い良く振り降ろした。

「炎！？ぐっ…！」

カズキはなんとか受け止めるが、パワーが違い過ぎる。

（まだ負けてない…。勝てなくても、せめて一矢報いる程度は…！）

そんなカズキの脳裏に、ある風景が思い浮かぶ。
それはカズキがいた孤児院にいた、ある子供の誕生日パーティー。

『『『誕生日おめでとうーーー！！！』』』
『それでは、ロウソクの火を消して下さい！』

誕生日を迎えたその子供は、ケーキの上のロウソクの炎を勢いよく吹き消した。

（そうだ、炎なら風で消せばいい……。）

レヴァンティンを受け止めていたフォルクスの刀身が、僅かに風を纏う。
そして風は徐々に強くなって行く。
シグナムはすぐさまそれに気付いた。

「！なんだ！？」
「吹き荒れろ！！」

風が急激に強くなり、シグナムを吹き飛ばす。

「でええええい！！」

さらにカズキがフォルクスを横に振るうと、刀身から伸びた竜巻が周囲をなぎ払った。
が、軌道が丸見えだったのでシグナムは余裕で回避した。

「ゼェ…ハァ…ゼェ…ハァ……。」

「これは…。」
「な、なんや今の…？」
「いきなり風がびゅー！ってなったです…。」
はやてとリイン、本日二度目の驚き……
「ってちょう待ちい！周りの木とか岩とかが切り傷だらけなんやけど！？」
「もしかして…、あの竜巻の全部が鎌鼬（かまいたち）とか…ですかね…。」
「んなアホな……。」
……の直後に間髪入れず、三度目の驚きに遭遇…。
「これはまた凄い技だな。だが、あれでは動きが簡単に読まれてしまうぞ。」
「は…はい……ゼェ…。」
カズキは今の技で相当体力を消耗したらしい。
「だが、なかなか筋は良い。甲野、剣技の心得は？」
「まったく無いです…。」
「それであの剣捌き…。よし、今後剣技に関しては私が稽古をつけよう。」
「あ、ありがとうございます…。」
「シグナムのお墨付きまでもらってもうた…。」
なんだかんだで模擬戦は終了した……が。
「な、なんやあれは！？」
「空間が……割れて…？」

突如、周囲の空間が裂かれ、中から爪のような武器を装備した黒い人型のロボットのような物が現れた。

そして、別の世界では。

「やはり奴を放置しておく訳にはいかん。周囲の邪魔者も含め、ここで消す。」

……飛王の策略が、カズキ達に襲いかかる…。

第8話　紫電烈火（後書き）

カズキ「新技のイメージが誕生日パーティーて…。」

良い案が思いつかなかったんだよ…。

フォルクス『私の出番も久しぶりでしたね。』

だって戦闘描写が無かったんだもん。

とりあえず、オリジナル展開をあと1、2話投稿したらＳｔｒｉｋｅｒＳ本編の流れに沿った話に入ります。

それでは次回もお楽しみに！

『ドライブ・イグニッション！』

第９話　少女の力（前書き）

とりあえず書き上げたのは良いものの…。
誰か、誰か私に長い話を書く才能をおぉぉぉ…！↑

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第9話　少女の力

突如、謎のロボットに襲われたカズキ達。
これは飛王が差し向けた兵士なのだが、彼らはそんな事を知っている訳が無い。

「あれは…、ガジェットや無い…？一体何なんや？」「少なくとも、我々に敵対している事は間違いないでしょう……甲野、まだやれるか？」
「……なんとか大丈夫です。でも、長くは無理ですよ…。」
「構わんさ。」

シグナムはレヴァンティンを、カズキはフォルクスを構える。

「行くぞ！」
「はい！」
「「うおおおお！！」」

カズキとシグナムは謎の軍団に突撃する。
しかし、シグナムは先程までと変わらぬ動きをしているが、カズキは若干動きが著しく鈍くなっている。
やはり、先程の模擬戦の疲労が影響している。

「甲野、無理に近接戦を仕掛けるな。私の後ろから射撃で援護しろ。」
「射撃？……あれか！了解です！」

カズキは軍団から距離を取り、意識を集中する。
すると、カズキの周りに魔力弾が複数出現した。

「……捉えた…、今だ！」

ディバインシューターが発動。
魔力弾が射出され、ロボットに命中、全滅させる。
しかし…、

「……え…！？」
「まだ来るか…。」

最初よりも大量のロボットが出現。

「もう一度だ。行くぞ！」
「はい！」

再びシグナムが斬りかかり、カズキがディバインシューターで援護する。
これで全滅するのだが……、

「またか…。」
「これじゃ、キリがない…！」

…再び出現する。
しかも、さらに数が増えている。

「さすがに…、これ以上は……。」
「どうすれば…。」

カズキだけでなく、シグナムの体力も限界に近づいていた。

「まずいで、このままじゃ2人共やられてまう。」
「こうなったら、私達で助けましょう！」
「せやな！」

はやてとリインが戦闘体制に入ろうとすると、今まで口を開かなかったシルビーが、静かに口を開いた。

「……甲冑…展開…。」
「「？」」

その瞬間、シルビーの服装が変わった。
そのデザインは、初代リインフォースの騎士甲冑の色違い。
アンダーウェアの色はやや暗いエメラルドグリーン、上着は白。
初代リインフォースでは金色だったラインは銀色になっている。

「し、シルビー…？どうしたですか…？」
「あれは甲冑…？色は違うけどリインフォースの…。」
「……。」

シルビーははやて達よりも一歩前に出ると、手を開いて左腕を静かに前に構え…、

「……封縛…。」

全てのロボットに白い魔力のバインドがかけられた。

「「！？」」

カズキとシグナムは突然の出来事に混乱する。

「シルビー…？」
「あの甲冑、リインフォースの…？」
周りの様子を気にする素振りも見せず、シルビーは今度は右腕を構え、足元には白いベルカ式魔法陣が出現する。
「……カズキくんに酷い事をしたら……だめ……。」シルビーの右の掌に魔力が集まる。
「……響け…ナイトメア…。」
集められた魔力が砲撃として放たれた。
「砲撃！？」
「なのはさんのディバインバスターと同じくらいのパワーです…。」
砲撃…『ナイトメア』は軍団の中央に命中、半分以上を消し飛ばした。
「…貫いて……、」
残りのロボットの周囲に白銀のナイフが出現する。
「あれは…、ブラッディダガーと同じ…。」
「でも、少し大きいような…。」
そして…、
「……ホーリーダガー…。」

ナイフが全てのロボットを貫いた。

「……。」

「凄い…。」

しかし、シルビーの背後に先程と同じロボットが1体出現、手にした爪で攻撃しようとする、が……。

「……ダガー…。」

シルビーが右手にホーリーダガーを握り、その場で1回転する。
ロボットは攻撃する間もなく真っ二つにされた。
リインが先程『大きい』と思ったのは、ブラッディダガーと違って握る為の柄がある為だ。

「……終わっ…た……。」

シルビーの騎士甲冑が解除される。
それと同時に、急に意識を失い倒れそうになる。

「うわ…っと！危なかった…。」

バリアジャケットを解除したカズキが駆け寄り、シルビーを抱き抱える。

「シルビー、大丈夫かな…。」
「んー…、大丈夫や。眠っとるだけや。」
「そうですか、良かった～。」

とりあえず、その場にいた全員は、一度隊舎へ戻る事になった。

「…やはり、あの程度では駄目だったか。」

一部始終を見ていた飛王が呟く。

「しかし、面白い物を見せてもらった…。フハハハハ…！」

「……。」

飛王は不敵な笑みを浮かべる。

そして、その様子を見る聖火の表情からは、その考えを読み取る事はできない。

「さて、奴らに対する次の一手を考えるとしよう。」

飛王は新たな策略を練り始めた…。

第9話　少女の力（後書き）

今回はシルビーが敵をぶっ飛ばしました！
ちなみにシルビーの技は、『A's PORTABLE』のリインフォースの技とほとんど同じです。

カズキ「て言うか、ダガーの形以外は全く同じでしょうが…。」

あ、バレた？

カズキ「簡単に分かるわ！」
リョウ「…個人的には、シルビーがカズキに『くん』付けなのが驚きだったんだけど…。」

あー…、このままだと非常に進みが悪い…。
ですが、めげずに頑張ります！
何としても、次回でオリジナル展開を終わらせて、原作に沿った話に入らねば…！

それでは次回もお楽しみに！

『ドライブ・イグニッション！』

第１０話　これからの事、そして破壊者（前書き）

なんとかカズキサイドが本編に突入できる段階まで行けた…。

そして途中…、少しふざけ過ぎたかな…。

今回はオリジナルライダーが登場して、リョウが少し変わった方法でライダーに変身します。

どのような方法で変身するかのヒントは、『メダル』です。

一応言っておきますが、オーズじゃないですよ？

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第１０話　これからの事、そして破壊者

謎の軍団と戦闘を終えたカズキ達は、隊舎の部隊長室に集まっていた。
なお、シルビーは大した怪我やダメージも見受けられなかったが、万が一の事を考えて医務室に運んだ。
今は事情によりシャマルは不在だが、はやてもある程度は医療機器が扱えるのであまり問題はない。

「2人共ごめんな。最初はただの模擬戦のつもりやったのに…。」
「いや、はやてさんのせいじゃ無いですよ。」
「その通りです。主はやての責任ではありません。」
「ここにいる皆、あんな事になるなんて思いませんでしたから、はやてちゃんは気にしちゃダメです。」
「ありがとうな、皆。」

さすがに模擬戦の最中にガジェットでも無い謎の軍団に襲われるなど誰も考えられないだろう。

「それにしても、なんや今日は驚きの連続やな…。カズキ君が物凄い動きをして新技を出すし、変な鎧に襲われるし、シルビーが敵をぶっ飛ばすし……。」
「確かにあれは…。」

カズキも、まさかシルビーが自分から戦うとは思わなかった。

「シルビーが何者か気になる所やけど…、まぁ私達にはそんな事は関係あらへんし、無理矢理聞き出したりするつもりも無い。自分から話してくれるまで待つよ。」

「はやてさん…。」

カズキは内心驚いていた。
大概、人は目の前の人物が思いもよらぬ行動をすれば、それについてあれやこれやと聞き出そうとするものだ。
だが、はやてはそれをしようとしない。
カズキはシルビーと初めて話した時の彼女の怯えようがあっただけに、そんなはやての心遣いに感謝していた。

「それにしても…、」

はやてがいきなりニヤニヤし出した。

「は、はやてさん？」
「やっぱりカズキ君はシルビーに慕われとるな～。」
「は、はいぃ！？」
「だって、シルビーが攻撃する直前の言葉聞いとったやろ？」
「「成る程…。」」
「皆さん何なんですか～！？」

シグナムとリインは理解できたようだが、カズキが1人だけ理解できずに孤立している。

「まぁともかく、カズキ君はシルビーの所に行ってあげてな。シルビーはカズキ君がいてくれるのが嬉しいみたいやし、カズキ君かて心配やろ？」
「……はい、そうさせて頂きます。」

カズキは部隊長室から出て行った。

「…六課が稼働してからの課題が増えましたね。」
「せやね…。相手がガジェットやロストロギア以外にも増えるとなると、若干厳しいかもしれへんな…。」「ですね…。」
はやて、シグナム、リインの3人はこれからの事を考えていた。

一方、ミッドチルダの繁華街では…。
「…見つからない…。」
「簡単に見つかるような状況でも無いと思うけど…。」
リョウとアイリスは何かを探していた。
「カズキが何処にいるのかの情報、全然無いし…。」
「侑子さんに聞けば良いのに…。」
「あの人に聞いても、『対価が必要』の一点張りだから意味無いよ。」
「そうだった…。」
次元の魔女、壱原侑子がどんな人物なのか。
2人はその事を良く知っている。
「つまりは自力で探すしか無いんだけど…、無理があるっつーの…。」
「だよね…。」
「それに、紅さんがくれた『鳴滝レーダー』も無反応だし…。」
「今の所は収穫なしだね。」
「そういう事。」

とりあえず、鳴滝レーダーのネーミングセンスの無さに全力で突っ込みたいのを抑え、リョウ達はミッドチルダの町を歩いて行く
ちなみに、命名者は仮面ライダー龍騎に変身する『城戸真司』だ。
そんなこんなで、人気の無い場所に差し掛かった時……、

『おのれディケイドオオオオオ！！！！』

鳴滝レーダーが非常に近所迷惑な音を響き渡らせた。

「うるせええええ！！」

リョウは速攻でスイッチを押し、やかまし過ぎる音を消す。
この鳴滝レーダーは、鳴滝が異世界移動の際に使用するオーロラが発生すると、鳴滝の声で教えてくれる……色んな意味で迷惑な道具だ。

「コレ、一度返品したい。」
「恥ずかしいよね…。」
「……とりあえず、反応があった場所に向かおう…。」

レーダーの音に心底疲れながらも、反応があった場所に向かう。

「…大体この辺だよな…。」

そこは廃棄された工場。

「……！誰だ！？」

リョウは何者かの気配を感じ、叫んだ。

すると、1人の男が現れた。
「ほう…。早かったな、篠崎リョウ？」
「何故僕の名前を？」
「ゾル大佐から聞いたからな…。」
「つまり、狙いは僕か。」
「いや、あくまでお前は要注意人物だ。用があるのは、俺が殺し損ねたお前のコピーだ。」
「！！」
「奴の居場所は分かっている。早く仕事を終わらせたいが、まずはお前を始末する。」
そう言うと、男は何かを取り出した。
「……それは、ディケイドライバー…、いや違う…。」
「まぁ、似たような物さ。」
男が紫のバックルを腰にあてると、ベルトが伸長されて装着された。
そしてカードを取りだし…、
「変身。」
カードをベルトに挿入した。
〔ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＳＴＲＯＹ！〕
すると、男のの周りを囲むように黒い虚像が出現し、男に重なる。
そして現れたのは、暗い紫のボディに黒い複眼の仮面ライダー…。
「俺の名は、仮面ライダーデストロイ…。」

「デストロイ…？」
「ゾル大佐が言うには、『対破壊者用最強兵器』だそうだが、正直な話、破壊者とやらが誰なのか分からん。」
「……。」
リョウはゾル大佐…と言うか鳴滝の説明の足りなさに呆れてしまう。
「では、行くぞ！」
リョウの様子を完全無視し、デストロイはやや大型のライドブッカー…『ライドデストロイヤー』のソードモードでリョウに斬りかかる。
「いきなり！？」
「俺は戦う時は容赦はしないのでな！！」
リョウはバックステップでデストロイの攻撃を避けると、右腕を構える。
「こうなったらあれを…」
「させるか！」
「なっ！？」
デストロイは素早くリョウの目の前まで移動し、攻撃を仕掛けてきた。
リョウは何かを準備しようとしていたが、相手の攻撃により中断せざるを得ない。
「くそっ……！」
「ハアアアアア！」

リョウはデストロイの攻撃から逃げ続ける。
「これじゃラチが開かない…！」
「リョウ！下がって！」
「！」

仮面とマントを身に付けたアイリスがリョウに叫ぶ。
リョウは指示通りにデストロイから距離をとる。

「グリーンロープ、サンダーボール！」
「なっ！？」

デストロイの足下からツタが生え、それがデストロイの足に巻き付いて動きを封じる。
さらにアイリスが手から電気の球『サンダーボール』を発射。
サンダーボールが命中したデストロイは電気で麻痺し、動きが鈍る。
さらにグリーンロープで足を固定されている為に身動きが取れない。

「助かったよアイリス。」
「お礼はいらないよ。それより早く！」
「了解！」

リョウはポケットからマゼンタのメダルのような物を取り出す。

「何だ…それは…！？」
「ちょっとした秘密兵器さ！起動実験を兼ねて使わせてもらう！！」
『Ｓｔａｒｔ　ｕｐ.』

メダルから電子音声が発せられ、一瞬光を放つ。

そしてメダルは白いバックルのベルトに変わり、リョウの腰に装着された。

「それは…、仮面ライダーのベルトだと…！？」

「正確には、それをデバイス化した物さ。」

そしてリョウは、ベルトの右側にマウンドされたバインダーからカードを１枚取り出す。

「そのデストロイは、悪魔に対する最強兵器なんだろ？だったら…、」

リョウはカードを構え…、

「その『悪魔』に勝てるのか、試してみな。変身！」

ベルトのバックルにカードを装填した。

〔ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！〕

すると、リョウの左右に灰色の虚像が１０体出現。それらがリョウに重なり、頭部には数枚のプレートがはめこまれる。

そして現れたのはマゼンタのボディに緑の複眼の戦士……。

「何だ…お前は…？」

「…『世界の破壊者』と呼ばれ、ゾル大佐が『悪魔』と呼ぶ存在、ディケイド。まぁ、簡単に言うと……」

リョウは一呼吸置き、本家と同じ決め台詞を言い放つ。

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！！」

第１０話　これからの事、そして破壊者（後書き）

と言う訳で、リョウがディケイドになりました！

リョウ「変身方法が…。」

カズキ「て言うか、いきなりチートが入った気が…。」

大丈夫、ディケイド原作ほどチートにはならない…ハズ。

リョウ「おーい。」

ちなみに、こうなった経緯は、

ライダーメダル購入

←

見た目がデバイスっぽくね？

←

ならベルトをデバイスにしちゃおう！

…です。

カズリョウ「「安直…。」」

次回はカズキ＆アイリスｖｓデストロイです！

それでは次回もお楽しみに！

『ドライブ・イグニッション！』

第１１話　深まる謎（前書き）

戦闘描写が上手く書けたか分からない…。
でもそれなりに良くできたと思います。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｈｉｄｄｅｎ　Ｔｈｅ　Ｆａｃｔ～』

……始まります。

第１１話　深まる謎

「通りすがり…？」
「まぁ、本来のディケイドの決め台詞だけどね。やっぱり雰囲気は必要でしょ？」
「ふん、成る程な…。」
「さて、お喋りはこれくらいにして、そろそろ始めようか。」

ディケイドに変身し、破壊者の力を手にしたリョウはライドブッカー・ソードモードを手にとり、構える。

「良いだろう。」

デストロイもソードモードのライドデストロイヤーを構える。

「ハァッ！！」
「うおおおお！！」

ディケイドとデストロイは剣をぶつけ合う。
だが、互いの武器の大きさが違う為、その戦い方も違っていた。
ディケイドは連続で素早く攻撃を仕掛け、デストロイは手数は少ないが重い一撃を繰り出す。
互いに一歩も譲らぬ攻防を繰り広げる。
そして、何回か剣のぶつけ合いの後、つばぜり合いになる。

「……って、何なんだこのパワー……！」
「お前の力はその程度か？」
「（くっ…、これじゃ持たない…！）このっ！」
「ぐっ！？」

ディケイドはデストロイの腹に蹴りを入れ、一旦後退する。
そしてライドブッカーをガンモードに変形させ、ベルト…『ディケイドライバー』にカードを装填する。

〔ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ！〕

「喰らえ！」

ライドブッカーの銃口が増え、赤い光弾が連射される。

「こんな物！」

しかしデストロイはライドデストロイヤーで光弾を全て弾く。

「今度はこちらの番だ。」

デストロイはライドデストロイヤーを変形させる。
ライドデストロイヤーはライドブッカーよりも大型の為、変形させた銃もかなりのサイズになる。
それはもはやガンモードとは呼びがたい。
言うなれば、『マグナムモード』だ。

「行くぞ。」

デストロイはマグナムモードのライドデストロイヤーから青い光弾を発射。
連射性能は低いが、一発あたりの威力が桁違いだ。

「くっ！このっ！！」

ディケイドはライドブッカーをソードモードにしながら、光弾を避けつつデストロイに近づく。

〔ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＳＬＡＳＨ！〕

「そらっ！」

「チッ！」

デストロイは防御ができなかった為、後ろに跳んで斬撃を回避。そしてディケイドとデストロイは一度攻撃を止め、向かい合う。

「なかなかやるな。」

「お前もな。だが、このままでは決着がつかん。そろそろ本気で行かせてもらう。」

そう言うと、デストロイはカードを一枚取り出し、紫色のベルト…『デストロイドライバー』に装填した。

〔ＤＥＶＩＣＥＲＩＤＥ　ＲＡＩＳＩＮＧ－ＨＥＡＲＴ！〕

すると、デストロイの右手に一本の杖が出現。

金色の先端に赤い球体がはめ込まれたその杖の名は……レイジングハート。

「デバイス！？」

「使うのは初めてだがな。さて、こいつの使い方は……。」

すると、レイジングハートの先端のフレームが組み変わり、砲撃用の『シューティングモード』に変形した。

「……こうか。」

「！？」

レイジングハートの先端にやや暗い青の光が集まり、それが太いビームのように発射された。

砲撃魔法、『ディバインバスター』だ。

ディケイドはそれをギリギリで回避する。

そして砲撃は何もないコンクリートの床に命中、そこにはクレーターができていた。

「なんて威力…。」

「ほう…、なかなか使いやすいな。」

デストロイは再びディバインバスターを放とうとする。

「させるか！」

ディケイドはカードをディケイドライバーに装填。

〔ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＫＡＢＵＴＯ！〕

ディケイドライバーを中心に赤い装甲が全身を覆い、ディケイドは『Ｄカブト・ライダーフォーム』に変身。

そしてＤカブトはさらにカードを装填。

〔ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＣＬＯＣＫ－ＵＰ！〕

Dカブトは『クロックアップ』を発動して超高速の世界に突入。
ディバインバスターが発射される寸前に、ライドブッカー・ソードモードでレイジングハートを叩き落とし、さらに背後に回り込み斬りつける。

「がっ！？」

訳も分からないまま、デストロイは初めてまともなダメージを受ける。

「ふぅ、危ない危ない。」

クロックアップが解除され、Dカブトが姿を表す。
Dカブトはディケイドに戻り、デストロイに対してある指摘をする。

「……あんた、戦いに慣れてないだろ。実力はそこそこあるのに経験が浅いから、デストロイのスペックでカバーしようとしている。パワーもスピードもあるのにさっきから動きが単純なんだ。」
「くっ…！」
「それを何とかしないと、僕はおろかアイリスにも勝てないよ。アイリスは僕より防御技が得意なんだ。今のあんたの攻撃は全部受け止められ、反撃を喰らって秒殺だ。」
「黙れ！」
〔ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＳＴＲＯＹ！〕

ディケイドの言葉に逆上したデストロイはカードを装填して必殺技の体制に入る。
デストロイの両足にエネルギーが溜まり、跳び蹴りを放つ。
デストロイの必殺技、『デストロイクラッシュ』だ。

「望む所だよ。」
〔ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！〕
ディケイドの目の前に何枚もの巨大なカードが、デストロイに向けて一枚ずつ上にずれて配置される。
ディケイドはそれに向かって上向きに蹴りを放つ。
ディケイドの必殺技、『ディメンションキック』だ。
「ハアアアア！！」
「でやあああああ！！」
２人のライダーキックが正面からぶつかり合い、爆発が起こる。
そして…。
「ぐあっ…！」
「やっぱり…、パワーは互角…。」
結果は相討ち。
お互い変身は解除されていないが、かなりのダメージを負っている。
「ここは一度退かせてもらう…。」
突如灰色のオーロラが出現し、デストロイはその中に消えていった。
「…やっと終わった……。それにしても、ますます意味が分からなくなった。鳴滝の目的って…？」
ディケイドは変身を解除してリョウに戻り、ディケイドライバーは

メダル型の待機形態になる。
既に元の姿に戻っていたアイリスがリョウに声をかける。

「リョウ、大丈夫？」
「うん、とりあえ…グッ！？」
「リョウ！？」

リョウは右足を押さえて座り込む。
どうやら、最後のぶつかり合いで痛めたらしい。

「痛たた…。」
「ちょっと見せてみて。」

アイリスがリョウの足首を見てみると、赤く腫れていた。

「捻挫…かな…？」
「最後の最後でミスったみたい…。」
「少し休んだほうが良いよ。」
「そうするよ…。」

リョウとアイリスは近くから木の箱を持って来て埃を払うと、その上に座った。

「ところでリョウ、私ってそこまで強くないよ…？」
「いや、防御面なら最強でしょうに…。この間なんか僕の撃ったディバインバスターの流れ弾を普通のバリアで全部受けきったろ？」
『あれは凄いの一言に尽きますよ。』
「それを言ったら、リョウもドリルマンの防御無効化攻撃をシールドで防ぎきったよね。」
「いや、あれはあれで結構きつかったからね？」

「それでその後、疲れてすぐに寝ちゃったんだよね。」
「そうそう。しかも夕飯を食べ損ねるっていうオマケ付きで。」
「それで次の朝に……ふふっ。」
「な、なんで笑うのさ？」
「だって、あの時のリョウのご飯の食べ方…！」
『確か、相棒がご飯と目玉焼きを……。』
「うわあああああ！言わないで！恥ずかしいから言わないでえええええ！！！」
「周りには誰もいないよ？」
「それでも恥ずかしいんだってばあああ！」

戦いの話からいつの間にかリョウの食事に関する黒歴史の話に変わってしまった。
しかし、アイリスはもちろんリョウも悪い気分はしない。
こうやって笑いながら話ができることが嬉しくてたまらないのだ。

「ふふっ！今日はここで休もう？足も痛めちゃったし、久しぶりにゆっくりするのも良いと思うよ？」
「そうだね。せっかくだから久しぶりにゲームでもやる？前の世界で買ったオセロとかがあるし。」
「うん！」

すると突然、ファーブニルがリョウに念話で話しかけてきた。

『《相棒。》』
「《ん？》」
『《アイリスさん、本当に明るくなりましたね。一緒に旅を始めてから、笑顔を見せる回数も圧倒的にふえてきました。》』
「《まぁ、きっかけは熱斗達との触れ合いだけどね。僕は何もしてないよ。》」

『《何もしていないなんて事は無いと思いますが…。》』
「《へ？》」
『《きっかけは熱斗さん達でも、最終的にはあなたのおかげなんですよ、相棒。》』
「《どうだか。》」
「そういえばリョウ、ご飯はどうするの？」
「……この間買った野菜とツナ缶で何とかする。大丈夫、まだ野菜は傷んでないハズ…！」
「最近ずっと缶詰だよね。たまにはちゃんとした物を食べないと…。」
「仰る通りで…。」
その日は2人共、夜までのんびり過ごしていた。

第１１話　深まる謎（後書き）

リョウ「まさかデストロイがデバイスを使ってくるとは…。」

実は、ライダーにデバイスを使わせるのをずっとやりたかったんだよね。

最初は普通のアタックライドにしようかと思ったけど、結局デバイスライドになりました。

ちなみに、今回登場したレイジングハートは初代の物です。

エクセリオンじゃないですよ？

今回はリョウ達の日常描写も入れてみました。

いや～、本当に仲がいいですよこの２人。

さて、次回からＳｔｒｉｋｅｒＳ本編に沿った話に入ります。

ここまでがやたらと長かったなぁ…。

それでは次回もお楽しみに！

『ドライブ・イグニッション！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4007z/

魔法少女リリカルなのはStrikerS 〜Hidden The Fact〜

2012年1月10日22時45分発行